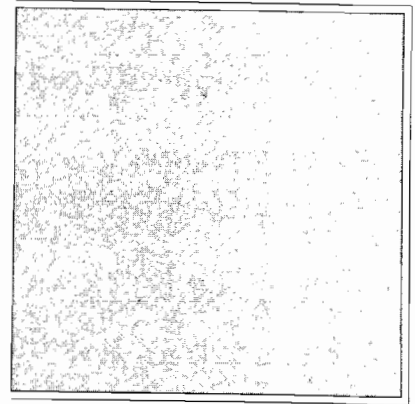




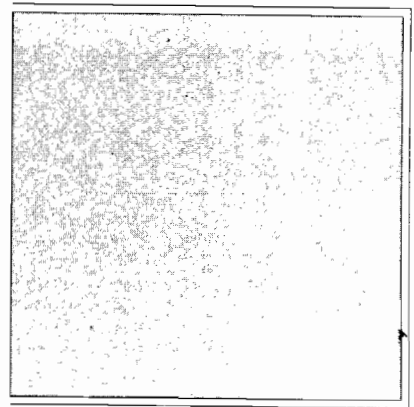
ファシズムと 表象の主体

丸山、アドルノ、ユートピア

クリストファー・L・ヒル

竹内孝宏 ▶ 訳

Fascism and the Subject of Representation:
Maruyama, Adorno, Utopia
CHRISTOPHER L. HILL



彼らはみずからを表象することができない、
彼らは表象されねばならない。

——マルクス・ホルイ・ボナバルトの
ブリュメール一八日(一)

年月の経過にもかかわらず、丸山眞男とテオドル・アドルノの仕事は、ファシズムの主体性を理論化するさまざまな試みの中でもっとも洞察に満ちた試みとして、今日なお依然として突出している。彼らの仕事を比較することによって、ファシズムの台頭に光が当てられるのみならず、彼らのファシズムに対する抵抗の概念に興味深い類似が存在するということが明らかにになる。日常生活のファシズム化に対する圧倒的なベシミズムにもかかわらず、二人とも、個人的な主体——ある種の——は抵抗することができるのだという

意識的な試みを無視し、ロゴス中心主義の咎で丸山とアドルノを激しく非難する攻撃は、理論的政治学を彼らが関わっていた社会の政治学とすり替える危険を背負っているのである。

早急な判断を下すことなく、ある一つの前提を考察しなければならぬ。この前提は、それぞれの場合において、ファシズム分析のみならず主体というものを問題化する試みについてもその土台になっている。すなわち、ラディカルな批判のためにはある程度のユートピア主義、戦略上の、そしてまた議論上のユートピア主義が必要だという前提である。アドルノと丸山がファシズムの墮落した主体に対して理想的な抵抗する主体を仮定したのは当然のことである。そうすることによって批判のバースペクティヴが可能になるからである。アドルノは、『ミニマ・モラリア』を締めくくるあのもつともよく知られた文章の中でこのバースペクティヴを簡潔に表現した。「絶望に臨んで確実に実践することのできる哲学はただ一つ、あらゆる事物を贖罪という立場から見た場合に現れるようなものとして見つめようと試みることである」(3)。丸山とアドルノの仕事に対してより突っ込み多いアプローチをするなら、その出発点はこのような視点にある。批判を免除するところではないのであって、彼らの仕事のこうした前提を承認するためには、「ロゴス中心主義的」であるか否かということよりも困難な問いを立てねばならないのである。ユートピア主義的な姿勢の中にある真理の座とは何なのか、と問わねばならない。アドルノと丸山どちらにとってもファシズムは表象の危機を際立たせたわけだが、この危機をユートピア主義的に解決するのはみずからを表象することのできる主体である。こうした表象の危機は、政治のみならず分析的言説においても現れる。結局、そうした自己表象する主体はまた、彼らの仕事において、ファシズ

ムに関する真理の所在地なのである。言い換えれば、ロゴス中心主義の主体——どれだけ問題視されているとしても——と、ファシズムに関する真理の表象との関係とはいかなるものなのか、と問わねばならないのである。

そうしたかたちで丸山とアドルノを比較するにしても、一九三〇年代の日本とドイツにおける政治的な趨勢の差異を無視する必要はない。興味深いことに、こうした趨勢に対する彼らの分析には類似点が存在する。ファシズムの台頭をめぐるコントラストとしてもっとも頻繁に述べられてきたのは、ドイツや他のヨーロッパ諸国におけるカリスマ的な指導者による支配と、日本における軍部、財界、政界といった集団によるより拡散的な統治とのコントラストである。アドルノは、しかし、国家社会主義の台頭におけるより幅広い社会的経済的構造の役割を絶えず強調し、ヒトラーが権力を握るにあたってその基盤となったのはより幅広い社会的な変化であると主張した。丸山も同様に、政党政治の崩壊とそれに続く一般市民の戦争動員との原因を、単に政治的な構造だけではなく、社会的な構造に求めた。こうしてそれぞれが、一九三〇年代よりもずっと以前の時代に「ファシズム」という政治運動の起源があると考えていたのである。アドルノの場合、この起源は、労働と文化的な産物における資本主義市場の確立が社会構造に与えた衝撃のうちに存在する。他方丸山にとっては、それは「封建制」の名残りが明治時代の「近代」日本社会に織り込まれたことのうちに存在する。どちらにしてもファシズムは、非ファシズム的と称する社会にもまた同じように明らかな全体的趨勢の要素なのである(4)。彼らの仕事にはさまざまな類似点があるが、その中でもっとも際立っているのは、丸山もアド

ルノも、こうしたより幅広い社会の動きによって育まれた主体――

言葉の政治的かつ認識論的意味における――は不完全であり、だからファシズムを典型とする反動的な大衆政治運動のようなものにする傾向があるのだと主張したことである。このような主体の欠陥を分析しながら、彼らは、ファシズム化させられることに抵抗しうる理想的な主体の輪郭を暗黙裡に描いていた。

「無責任の体系 (system of irresponsibility)」という丸山のよく知られた (悪名高いというわけではないにしても) テーゼは、近代日本における政治責任を個人や集団に対しては免除した。近代日本の基盤は不完全性の観念である。日本は「……嘗て『このような』国家主権の技術的、中立的性格を表明しようとしなかった。その結果、日本の国家主義は内容的価値の実体たることにどこまでも自己の支配領域を置こうとした」。こう論じることによって丸山は、私的領域と公的社会的領域が相互にまったく切り離されたものとして確立したことがいまだかつてないという結論を下した(5)。彼は付け加えた。「従つて国家秩序の形式的性格が自覚されない場合は凡そ国家的秩序によつて捕捉されない私的領域というものは本来一切存在しないこととなる。我が国では私的なものが端的に私的なものとして承認されたことが未だ嘗てないのである」(6)。その結果、主体は絶えず国家主義イデオロギーの「見えざる網 (invisible net)」に捕らえられ、「私的領域 (purely personal)」は国家統制の問題になつた。国家は個人の中にまで拡張し、丸山が公的 (public) であると考えていたものの境界で停止することはなかった。

このような浸透に対応して、主体は倫理的な価値を内面化することができなくなる。倫理の点で、丸山のファシズムの主体は外部的な構造に左右される。

ておけば、この装置は倫理的な内面をもった主体をつくり上げ、またそうした主体が政治に参加する手段となる。しかしそうでなければ表象のシステムは解体し、個人も装置とともにファシズムへと向かう。日本においては倫理が外部化されたため、と丸山は言った、「……たゞ国体が論議されるや、それは直ちに政治問題となり、政治的対立に移行した」(9)。近代日本社会の「無責任の体系」が産んだのは、したがって、非政治的であると同時に超政治的な主体、独立した倫理的立場を形づくることはできないが、しかし外部的なイデオロギーの要請があれば容易に政治的対立へとなだれ込む主体であった。

丸山が日本ファシズムの分析を進展させるにあたって用いた比較の枠組は、欠陥を抱えた日本に対する理想化された完全なヨーロッパというものをつくり上げる。丸山の主張によれば、一六、七世紀のヨーロッパ宗教戦争は正反対な二つの結果をもたらした。一方で、各宗派はみずからの原理を政治行動に移すという観念を放棄するよう余儀なくされた。他方で、神授の王権によって支配する君主は公共秩序の保護者としてみずから役替えをしなければならなかった。「かくして形式と内容、外部と内部、公的なものと私的なものという形で治者と被治者の間に妥協が行われ」た、と丸山は書いた(10)。こうした妥協の合意下で、信仰と倫理は私的かつ内面的な問題となり、他方国家は法的、技術的、そして外部的な構造となった。公私はこのようにしてヨーロッパ社会においては完全に切り離された領域になった、というのが丸山の見方である。日本では生じたことがなかったと彼が考えていたのはまさにこのような事態である。丸山のレトリックにおける否定辞の優位は、彼の思考の中でどれほどヨーロッパの歴史が社会進化の普遍的なモデルであったのかとい

倫理は個性の奥深き底から呼びかけずして却つて直ちに外的な運動として押し迫る。国民精神総動員という如きがそこの精神運動の典型的なあり方なのである(7)。

こうして主体もまた、みずからの外部にある構造を倫理的な導きとして利用することによって、私的なものの境界を侵す。しかし、明確な主体の境界、自由主義政治学の社会構造理論における「個人」を形成するこの境界が近代日本社会に欠落していたといつても、丸山はその罪を個人ではなく社会構造に負わせたのであつて、このことを理解しておくのは重要である。丸山は一般市民、とりわけ知識人を、日本ファシズムと共犯したことを理由に激しく非難した。しかし個人の倫理や責任といったバースベクティヴから非難したのではなく、抵抗できなかったのは個人が悪いのだと言つたわけではない。むしろ彼は、個人的な無責任の起源を明治時代に確立した社会構造につきとめた。ファシズムのイデオロギーは、と彼は言つた、「なにも全体主義の流行と共に現われ来つたわけではなく、日本の国家構造そのものに内在していた」(8)。

近代日本には外部的、「技術的 (technical)」あるいは中性的な国家が欠落していたという主張は、政治における表象というものに対する丸山の理解にとつて根本的な原理であつたが、後で明らかにするように、それはまた政治に対する理解と表象にとつても根本的な原理であつた。丸山にとつて、国家の構造と政治的言説の構造はメカニズム、ないしは装置であるのが理想である。メカニズムや装置はその内部でとられる倫理的な立場に影響を及ぼすことがない。むしろ、それらは中立的な表象の技術である。適切な限界を設定し

うことを際立たせる。丸山は繰り返して主張した。日本ファシズムは「概念的組織をもたなかつた (no solid conceptual structure)」(11)、日本においては倫理のプライバシーを擁護する「教会的勢力は存在しなかつた (no ecclesiastical force)」(12)、権力が明治寡頭勢力間に分配されたことが主体的責任意識の「成立を困難ならしめた (impeded the development)」(13) (傍点、引用者)。

このような比較を通じて丸山が提示する理想化された「ヨーロッパ」に較べると、近代日本社会は不完全な、あるいは「停止した」発展段階にあつた。内面化された倫理は「近代的人格の前提 (a prerequisite of any true modernization)」であり、近代日本国家の主体はそれを欠いていたがゆえにファシズムの扇動に対してなすすべもなかったのだと丸山は明言した(14)。実際、丸山によれば、日本ファシズムの支配的な原型となつたのは、まさしく、維新以後の社会に生き延びた「幕末志士的な中世主義 (medieval Bakumatsu patriotism)」に他ならない(15)。ファシズム的な主体性が形成されるその基盤は社会構造であるという丸山の主張を支えているのは、こうした直線的な発展図式なのである。

一九三〇年代の政治的展開の中に、「民主主義へ向けての進歩」における偶発的偶然的な断絶、歴史的な倒錯を見るところは、それに先行する「政党内閣」との根本的な連続性を見逃すということにとどまらない。そのような見方は、明治維新以来日本という国家の来歴の中に存在し、日本ファシズムの進出を是認した思想的社会的構造のうちにこそ特徴的な底流があると、いうことを見損じている(16)。

それゆえ、丸山の分析では、他ならぬ近代日本社会の構造こそが主体の発展を停止させ、主体を不完全な状態のまま放置し、ファシズムの台頭に抵抗することを不可能にしたのである。

「無責任の体系」という丸山のテーゼと同様、ファシズムとは社会構造による主体の「脱個人化」であるとするアドルノの主張もまた、不完全性の観念に基づいている。アドルノの主張によれば、ファシズムのイデオロギーは主体のうちに「太古的なもの」を体系的に再生産し、主体を、「ノーマルな」、理性的な国家の中に認められるような利害に反して行動させる(17)。ファシズムへの退化というものがもつとも際立って現れるのは、ファシズム化した主体の集団が個々人の自我理想を指導者に置換し、その指導者を運動メンバーに託しての集団的な自我理想にしてしまうときであると、フロイトにかなり依拠しながらアドルノはこう断言した(18)。こうした置換の結果、ファシズム化した主体はみずからの自我を互いに同一視し、原始ホルドの状態にまで退化する。彼らの理性的な判断力はこうした状態にあつて宙づりにされる、だから彼らにできるのはただファシズムイデオロギーの命令に従うことだけである、とアドルノは言う。しかし、アドルノが一貫して強調していたところによると、その扇動能力にもかかわらず、ファシズムのプロパガンダは「人間があるがままに受け入れることしかない。すなわち、今日の規格化された大衆文化の実子、自律性と自発性をほとんど奪われた子供として」。この意味で、「ファシズムのプロパガンダは現存する精神構造をそれ自身の目的のために再生産してはならない」のであつて、主体のうちにさらなる変化を誘発することはない(19)。アドルノにとって、ファシズムの真の起源はこの精神構造の起源にあり、そし

そうした選択の規範化には、主体における「聴取の退化」が伴っている。聴取者であるという意識が、主体において、「小児的な」段階で「停止」させられてしまうのである。商品の具象化が意識にいかなる影響を及ぼすかということをめぐるルカーチの分析に依拠しつつ、アドルノはこう明言した。「聴取する主体が、選択の自由や責任とともに、音楽を意識的に認識する能力を失ったということではない。この能力は遠い昔から限られた集団のものであつたからだ。聴取する主体はまた、こうした認識の可能性を頑なに放棄するのである」(23)。文化産業の制度下では、聴取者にとって可能な選択があらかじめ決定されているにとどまらず、別の選択の可能性を考えるとすることもできなくなってしまう。その結果、彼が言うには、可能な選択は、自由になされるといふ外見を纏う。しかしこのことが意味するのは、見たところ能動的な抵抗——たとえばある一人のジャズ演奏家がとりわけ好きだと熱をこめて宣言すること——も、選択の範囲が限られているのを肯定する「疑似能動性」にすぎないということである(24)。そうした肯定の源泉は無知ばかりではなく、主体の観点から見れば現実的である一つのシステムに適応する必要性というものもまたその源泉になっている。主体の退化を理解するためには、とアドルノは述べた。

もはやそれほど多くのことを考えない人間がどれだけ数の悲痛を免れるか、現実的なものは正しいのだと肯定する時に人がどれほど余計に「現実と調和して」振る舞うか、不平も言わずにみずから機械に溶け込む人に機械を使う能力がどれほど余計に与えられるか、それを思い返してみれば十分である(25)。(傍点、引用者)。

てまた、理性的な主体がファシズム化した集団の「ポスト心理学的な、脱個人化された社会原子」へと変容する過程にある(20)。丸山の場合と同じように、アドルノはこうした起源を狭義の政治構造の中に見出すことはせず、社会の中に——とりわけ、商品資本主義の文化産業によって引き起こされた主体性の変容の中に見出した。この変容に関するアドルノのもつともよく知られた議論は「啓蒙の弁証法」に見られるのであるが、以下で私は、より簡潔な陳述として、それ以前の論文「音楽における物神性格と聴取の退化」に依拠したいと思う。

文化的生産物の商品化は、アドルノの主張によれば、文化市場における自由な選択の構造を破壊することによって、個人というものを消去してしまう。音楽産業が商業化され、ラジオとレコードインダストリーが製品を流通させる主要な手段になると、美的な選択はマーケティングへの考慮によってあらかじめ決定される。その結果、一人の聴取者がある作品を好きか嫌いかという問題は、聴取者集団における人気の問題になる。最後には、アドルノが言うには、「よい」というものが、聴取者の心の中では、幅広く入手可能なものと区別がつかなくなる(21)。このことは「軽」音楽にだけ当てはまるのではなく、美学的にもっとも進んだ「厳粛」音楽以外のすべてに当てはまる。アドルノは主張した。エリート音楽やポピュラー音楽は等しく文化産業によって影響されるからである。どちらの場合も問題は内容や美的な意図ではなく、製品が消費者に送り届けられるその構造である。「個人を犠牲にする」ということは、成功を収めたものの規範に順応すること、すなわち他人がすることをするということであるが、それは、消費品物の規格化された生産によって幅広い領域で誰もが同じものを与えられるという事実の原因がある(22)。

アドルノの文化市場分析は、「中立的な」国家に関する丸山の説明と響き合っている。商品資本主義において、市場はもはや、中立的な分配技術として機能することによって可能な選択の範囲を表象するということをしてしない。むしろ、それは選択を制限し事前に決定し、そしてその過程で趣味——依然として名目上は自由な——を画一化してしまう。市場というものは消費者が自由に選択することによって可能にし、それによって成熟した主体をつくり上げるのが理想なのだが、しかし資本主義市場は主体が退化する原因になっている。この退化は文化的な能動性ばかりか政治的な能動性にもまた影響する、とアドルノは言う。

調査によって、ラジオ聴取者のなかでも軽音楽支持者は政治に興味をもたないということがわかったが、これは偶然ではない。個人的な隠れ家やいつもながら疑わしい安全性に対する見込みが、隠れ家を求める状況における変化の展望を妨げるのである(26)。

これは、アドルノがファシズムのイデオロギーを論じる際に言及したあの脱個人化の状態である。そうした状態にあつて主体は、自力の選択を処方することができないばかりか、さらに、所与の限られた選択範囲を「抵抗」の名において肯定するよう導かれる。同じことはファシズム下での主体の実存にも当てはまる、とアドルノは主張した。「現状が当然視され石化されると、それに適応したり、現存するものとの同一化によって少なくともいくらかの満足を得たりするよりも、それを見通すほうがよりいっそうの努力を必要とする

——これがファシズムのプロパガンダの焦点である(27)。広告コピーのような政治的スローガンを用いることによって、ファシズムの指導者は、ただ単に、集団心理学を集団支配の手段につくりかえているだけなのである。

ファシズム化した主体は自我理想としてその指導者を認知するというフロイト的な主張からも明らかのように、アドルノの見るところ、ファシズム化した主体は、フロイト理論が「ノーマルな」主体性として仮定しているものに向けての発展が停止した状態にある。実際アドルノは、自由主義的な意味での「個人」などもはや存在することができないと認めてしまうはずと有益かもしれないと言っていた(28)。しかし、丸山が否定辭に頼ったのと同じようにアドルノは「停止」「退化」といった言葉を執拗に用いるのであるが、そこから、彼の分析がどの程度、まさにそうした「完全な」「成熟した」主体へ向けての直線的な発達経路というものを前提しているかということが明らかになる。丸山の場合と同様、社会構造はこの発達を妨げ個人を破壊したことによって咎められねばならない。主体の発達を宙づりにすることによって、資本主義社会は、文化産業に対する美的な抵抗であれ、ファシズムに対する政治的な抵抗であれ、およそ抵抗というものを排除してしまうのである。

アドルノも丸山も、完全な、あるいは十分に発達した主体、退化や不完全性といった彼らのレトリックが仮定しているこの主体の性質を詳細に論じることにはなかった。それは何々であるといった肯定的な言葉で素描されるよりもむしろ、この理想的な主体は、ファシズム化した主体とは何々ではないといった提示としてあらわれる。したがって丸山の場合、ファシズム化していない主体が内面化され

ことであった。アドルノが「理想的」、フロイト的主体を提示したのも同様で、驚くべきことに、抑圧と啓蒙主義的な理性を是認しているということになるのであるが、それらはどちらも、彼とマックス・ホルクハイマーが『啓蒙の弁証法』において批判したものである(30)。自分にとっての理想的な主体は過去、すなわちヒトラーとラジオとジャズの時代以前に存在していたということをアドルノはしばしばほめかしたが、彼の著作の政治的な姿勢から立証されるのは、彼もまたこのような主体を、ドイツにおけるファシズムや世界中の文化産業の反合理主義的、疑似自由主義的レトリックに対抗する力として提示したという事実である。合理化された文化によって許される単に肯定的なだけの解放に対して真に合理的な合理主義を實踐すれば、この理想的な主体は、アドルノとホルクハイマーが『弁証法』において要求した啓蒙の啓蒙の成果となるであろう。

アドルノと丸山の仕事では主体というものが異なるかたちで提示されているが、それを結び付けるのは、みづからを表象することのできる主体はファシズムにおける表象システムの解体に対してその防波堤たりうるという共通の主張である。丸山とアドルノにとっての理想的な主体はみづからを表象することができるが、しかしそれはまたファシズムの真理を表象する——それとはつきり述べる——ことができる。この意味で、彼らにとっての理想的な主体とはまた彼らの仕事の主体、分析し、そして語る主体でもある。近代日本における中立的、技術的政治機構の不在が主体を不完全な状態のまま放置したという丸山の主張は、根本的に、ファシズムの主体は政治の場でみづからを表象することができないという主張である。一方で、主体は独立した政治的立場をとることができず、したがって表象するべきものを何もたない。他方で、表象のシステムによって

た倫理をもっているのに対してファシズム化した主体にはそれが欠落しているということになり、またアドルノの場合、ファシズム化していない主体が代替の選択を思い描くことができるのに対してファシズム化した主体にはそれが不可能であるということになる。この理想的な主体は、見かけの現実の虚偽と、そしてまたイデオロギ―の背後に隠された真理を見ることができると主張している。こうした主体の真理を表象する能力が抵抗の基盤になるのである。

アドルノも丸山も、この理想的な主体を現実存在するものとして提示することはなかった、いや、少なくとも彼らが書いていた時代に存在するものとして提示することはなかった。むしろ、彼らはそうした主体を議論上のものとして、戦略として、つまり日本、ドイツ、そして近代社会一般に関する分析の要素として提示した。こうした提示の否定的様式——そうでないものを理想化すること——は彼らの主張を極端なところまで推し進めた。彼らの議論上の意図を誤解すると、ファシズム社会のメカニズムも有効だと言っているように見えかねないほどである。丸山はこの理想的な主体を「ヨーロッパ的」「西欧的」主体として提示したが、たとえばそれは、奇妙なことに、ヨーロッパ的なファシズムを是認しているということになってしまふ。ドイツではファシズムですら日本よりも徹底している、と彼は言った。ドイツの場合、ファシズムは「我が闘争」という「世界観の体系(Weltanschauung)」をもち、現実主義的な戦略にしたがって権力を掌握しようとした(29)。しかし、一九三〇年代の日本における国粹主義的レトリックの遺産、および太平洋戦争における英米の勝利ということがあった以上、丸山がこうした幻想を愚直に提示したわけではないのは確実である。一九四六年において、それが論争を煽り立てる力をもっているのは疑いようのない

正当にとってもよいという立場は決定されているため、逸脱は、もし発生する場合があろうものなら、国家に対する批判として誤表象されることになる。戦前において国体論議がただちに政治問題化したと丸山が明言するのはまさしくこのようなパースペクティヴからなのである。というのは、しかし、丸山のファシズム分析においては、選択可能な立場の範囲からの逸脱が必然的に表象のシステムそれ自体に対する批判になるということである。実際そうでなければならぬのであって、なぜなら彼の見るところ、主体の発達を停止させ、主体に対してみづからを表象することを禁じているのは、ファシズムの表象システムに他ならないからである。

同じように、文化産業は文化的な産物の入手可能な範囲をあらかじめ決定しているというアドルノの議論もまた、最終的には、資本主義的な主体は文化の場でみづからを表象することができないという議論である。丸山のファシズム国家と同様、アドルノの資本主義市場は、主体が立場を自由に選択することを許す中立性を欠いている。その結果たる退化によって主体は別の選択を構想することのできない状態のまま放置され、制限された選択の範囲を肯定するとそのシステムは自由であると言っているように誤表象される。こうした状況でもまた、選択を表象する別の方法が可能かもしれないという主張は現行の表象システムに対する批判となる。アドルノはこう明言した。「ついに、交換価値から解放された快楽は、どれもみな破壊活動であるかのような様相を帯びる(31)」。彼の見るところ、同じことは政治の場合にも当てはまる。主体をファシズムに傾かせるのは資本主義的文化における表象のシステムに他ならないのである以上、独立した政治ということはいかに主張しようとも、それは当のシステムに対する批判を必然的に伴わねばならないのである。

丸山とアドルノどちらの分析においても、政治的な行動と独立した主体性という観念との間にはあからさまな連関があり、そしてその主体性はたいいていの場合、古典的な民主主義理論と結び付いている。彼らのロジックでは、中立的な表象のシステムが存在するためには、主体が、まず第一に、自由な選択をすべく独立していなければならない、そしてつぎに、選択をすることそれ自体によってこの独立を放棄しなければならない。すなわち、理想的な主体は、みずから表象することができなければならないが、しかし表象の技術が作動するためにはこの能力を放棄し、表象されなければならないのである。これは民主主義理論のよく知られた定式であるが、奇妙な、非対称的な定式である。結局のところ主体はみずから表象することなくむしろ表象されるのだとしたら、なぜはじめから表象されずにいられようか——ファシズムの場合のように。さらに、なぜアドルノと丸山は、古典的な政治理論から距離を保とうとしていながら、表象というものに対してこうした一見正統的なパースペクティヴをとるのだろうか。

答えはこうだ。政治や文化に対する丸山とアドルノの理論的な表象は、一つの理想的な主体、政治や文化においてみずから表象することもできる主体への信頼に基づいているのである。そのような自己表象する主体はただ単に分析の前提であるにはとどまらない。より深く、まさにそうした主体によって分析は首尾一貫し、言葉になることができるのである。丸山の場合もアドルノの場合も、ファシズム化した主体はファシズムのイデオロギーによって表象され、したがって表象の可視的な客体になる。彼らのユートピアでは、理想的な、ファシズム化していない主体は表象されるのみならず、みずから表象する。この限りにおいて、それは表象の見えざる主体

としてとどまる。同じことは彼らの分析の中の表象システムの場合にも当てはまり、たとえばそれは、『ミニマ・モラリア』の中でアドルノが擁護している贖罪としての批判というパースペクティヴにおいて明らかである。ファシズム化した主体が表象と分析の客体であるのなら——これらの論文では実際そういうことになっているのであるが——他ならぬ空想上の、ファシズム化していない主体こそが、ファシズム化した主体と、歪曲した、それゆえ可視的なファシズムの表象システムを客観的に表象するのである。しかし、丸山とアドルノの分析の中の真理は、この主体がみずから表象されているのだとしたら、彼らの分析は、この主体がみずから表象する能力を、客観的な（不可視の）情勢の真理を所有している状態のまま保っておかねばならない。主体がみずから表象することができねばならないのは、社会における表象の中立性を維持するためのみならず、丸山とアドルノ自身の表象システムにおける表象の中立性をまた維持するためなのである。分析の構造において、そうなると、彼らの理想的な主体は、真理を客観的に知り、そして語ることでできる唯一の主体である。ファシズムを分析する必要性は、したがって、政治的であると同時に認識論的である一つの脅威から発してくる。ファシズムにおいては、政治と認識が共倒れになり、真理のパースペクティヴを可視的なものにしてしまう恐れがあるのである。

明らかに、自己表象する主体という理想はアドルノと丸山のファシズム分析の中にすっかり浸透しており、そうした主体は戦略的な立場にすぎないのだと明言したところで相殺することができないほどである。この空想上の主体は、丸山の分析にもアドルノの分析にも現れる信念の飛躍への鍵であり、したがって贖罪のパースペクテ

ィヴそれ自体への鍵である。丸山は、「超国家主義の論理と心理」の結語において、日本国民はいまやみずからの運命を手にかけていると明言したが、これは、ファシズムのイデオロギーという見えざる網の中の主体から内面化された倫理をもった理想的な主体、この運命に形を与えることもできる主体への跳躍を示している（32）。アドルノは、「フロイト理論とファシズムのプロパガンダのパターン」の末尾において、ファシズムのイデオロギーはみずから乗り越え、大衆の啓蒙が回帰するであろうと主張したが、この主張もまた同じように、彼が分析するファシズム化した主体から理想的な贖罪の主体への飛躍である（33）。

アドルノのユートピア的な契機は一般に、増大する否定性に対して、プラクシスの可能性を開放すまいとする試みとして説明される（34）。しかしアドルノの場合も丸山の場合も、こうした契機は、より深く、分析の場で真理を表象する可能性を開放すまいとする試みであるように思われる。そうした契機が論文の最後にくるといふことには注目すべき効果がある。ファシズム化した主体（表象の客体）とファシズム化していない主体（表象の主体）のギャップは論文の進行過程で着実に大きくなってゆき、ついに、それに橋を架け、分析の客観性を贖うことができるのはただ信念の飛躍のみということになる。しかし、このギャップに橋を架けるという行為はまたギャップを構築するという行為でもあり、そうすることによって政治の虚偽と認識の真理は分離され、触れ合わないまま保たれる。ファシズムの構造に対する丸山とアドルノの表象がほぼ全面的にベシミステックであるのを考慮するなら、真理を垣間見たということを説明するには他に方法がない。彼らにとつては、最終的に、ユートピア的なものだけが真理たりうるのである。

このような結論を下すにしても、分析における真理というものをどのように扱うかという問題は開かれたまま残る。それは分析のパースペクティヴという点のみならず、編成の点でもまたユートピア的な真理である。しかし、ユートピア主義の有益な決断をそれとは異なる閉じた型の真理と取り違えないようにするためには、この問いが開かれたままであるということが重要なのである。主体が「現実存在する」という方法的な誤解に基づいているといてこれらのファシズム分析を無造作に退けようとする衝動は、極度に筋違いの衝動である。なぜなら、それは異なる型の主体を「本当のもの」として登録し、ロゴス中心主義的な主体を追放しようとする破壊活動的な意図を見逃しているからである。のみならず、ファシズムに対する批判をファシズムの分析に対する批判に從属させることによって、それはある種の静観主義、主体というのはつねに、そして本質的にファシズム化されているものだと考える静観主義を生み出す危険を背負っている。アドルノと丸山をロゴス中心主義として読むことは唯一の可能な読みなのではなく、それどころか、近年における主体性の理論化に依拠した唯一の読みなのでもない。私はここでそうした読みの一つを試みた。しかし、ラディカルな批判というものはいまなお自意識的なユートピア的行為なのであって、分析の手段を分析の視野に入れる以上、ラディカルであればあるほどユートピア的になるということ、彼らをどのように分析するのであっても認識しておかねばならない。

【註】

(一) Karl Marx, *The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte*

- (1882). New York: International, 1972, p.124. [邦訳はたとえば村田訳国民文庫版なら一四八頁「ただし訳文は右記英訳に依った」]
- (2) ヴィクター・コシュマンは丸山の仕事のこうした側面を論じ、丸山をロコス中心主義的であると見なす。「ポストモダンの」な批判に価値があるのかという問いを発している。「ポストモダンの」戦後思想——丸山眞男と未完の近代のプロジェクト、「現代思想」15・15(一九八七年二月)、「二二二—二七四頁」[「好みゆき訳」]。主体の実体化に対するアドルノの抵抗と「うご」ことをめぐる議論についてはマーティン・シェイの名著 *The Dialectical Imagination* (Boston: Little, Brown, 1973) の最終章「とりわけ二二六—二二九頁と二七五—二七八頁を見よ」[荒川訳「弁証法的想像力」]、みすず書房、一九七五年、三三〇—三四〇頁および三八九—四〇二頁]
- (3) Maruyama Masao and the Incomplete Project of Modernity, *Post modernism and Japan*, eds. Masao Miyoshi and H. D. Harootunian (Durham: Duke University Press, 1989, pp. 123-141.)
- (37) Adorno, *Minima Moralia: Fragments from Damaged Life* (1952), trans. E. F. N. Jephcott (London: Verso, 1974), [三光訳「ミニマ・モラリア」]、法政大学出版局、一九七九年、三九一頁、ただし訳文は右記英訳に依った]
- (4) アドルノは、彼のもっとも簡潔なファシズム分析の一つとして「フロイト理論とファシズムのフロバガンダのパターン」を書いた。これは一九五一年のもので、一九三〇年代、四〇年代のドイツの諸事件のみならず、一九四〇年代のアメリカにおける実地の調査に基づいている。丸山も同じように、「アメリカや他の数多くの社会に対してほとんどためらわずに「ファシズム」という言葉を当てている。「ファシズムの諸問題——その政治的動学についての考察」(一九五二年)において彼は「うご」のように書いた。「ファシズムは二十世紀における反革命の最も鋭利な戦闘的な形態である」。
- (5) 「現代政治の思想と行動」(未来社、一九五七年)、二七二頁]
- (5) 丸山「超国家主義の論理と心理」(一九四六年)、「現代政治

- (25) Adorno, "On the Fetish Character in Music and the Regression of Listening" (1938), *Frankfurt School Reader*, p. 285. [音楽における物神性格と聴衆の退化]、三光・高辻訳「不協和音」音楽之友社、一九七一年、三六頁。ただし訳文は右記英訳に依った]
- (25) Adorno, "Fetish Character," p.280. [邦訳三〇〇頁]
- (23) Adorno, "Fetish Character," p.286. [邦訳四〇〇頁]
- (24) Adorno, "Fetish Character," p.292. [邦訳五〇〇頁]
- (25) Adorno, "Fetish Character," p.286. [邦訳三九頁]
- (26) Adorno, "Fetish Character," p.294. [邦訳五四頁]
- (27) Adorno, "Fetish Character," pp.134-135.
- (28) Adorno, "Fetish Character," p.136.
- (29) 丸山「超国家主義」七頁:「日本ファシズム」五七頁、(Morris, pp.1, 56)
- (30) とりわけ第一章「啓蒙の概念」を見よ。 *Dialectic of*

- の思想と行動」九—一〇頁。("Theory and Psychology of Ultra-Nationalism"(1946), trans. Ivan Morris, *Thought and Behaviour in Modern Japanese Politics*, p.4)
- (6) 丸山「超国家主義」一一—一二頁 (Morris, pp.6-7)
- (7) 丸山「超国家主義」一四頁 (Morris, p.9)
- (8) 丸山「超国家主義」一二頁 (Morris, p.7)
- (9) 丸山「超国家主義」一四頁 (Morris, p.9)
- (10) 丸山「超国家主義」九頁 (Morris, p.3)
- (11) 丸山「超国家主義」七頁 (Morris, p.1)
- (12) 丸山「超国家主義」一〇頁 (Morris, p.4)
- (13) 丸山「超国家主義」二〇頁 (Morris, p.17)
- (14) 丸山「超国家主義」一〇頁 (Morris, p.4)
- (51) 「日本ファシズムの思想と運動」(一九四七年)、「現代政治の思想と行動」五七頁。("The Ideology and Dynamics of Japanese Facism"(1947), trans. Andrew Fraser, *Thought and Behaviour in Modern Japanese Politics*, p.56)
- (91) "The Ideology and Dynamics of Japanese Facism" (1947), trans. Andrew Fraser, in *Thought and Behaviour in Modern Japanese Politics*, ed. Ivan Morris (London: Oxford University Press, 1963), pp.82-83, 116 | 簡は英語版のため書かれた。

- (17) Adorno, "Freudian Theory and the Pattern of Facist Propaganda"(1951), *The Essential Frankfurt School Reader*, eds. Andrew Arato and Eike Gebhart (New York: Continuum, 1982), p.122.
- (81) Freud, *Group Psychology and the Analysis of the Ego* (1921), trans. James Strachey (New York: W. W. Norton, 1959). [井村・小此木訳「集団心理学と自我の分析」]「フロイト著作集」人文書院、一九七〇年]
- (61) Adorno, "Freudian Theory," p.134.
- (20) Adorno, "Freudian Theory," p.136.

- Enlightenment* (1944), trans. John Cumming (New York: Continuum, 1991), pp.3-42. [啓蒙論「啓蒙の弁証法」]、岩波書店、一九九〇年、一六三頁]
- (15) Adorno, "Fetish Character," 279. [邦訳二八頁]
- (32) 丸山「超国家主義」二四頁 (Morris, p.27)
- (33) Adorno, "Freudian Theory," p.137.
- (34) 丸山「超国家主義」二四頁 (Morris, p.27)

Title: Fascism and the Subject of Representation: Maruyama, Adorno, Utopia
Author: Christopher L. Hill
© 1994 Christopher L. Hill